

天使たちの課外活動3

テオの日替り料理店

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 鈴木理華

1

教えられた番地の前でライジヤは立ち止まった。

アレクサ通り37番地。ここであつてははずだが、眼の前にあるのはどう見ても集合住宅である。

門も庭もない。扉だけが通りに面している。

本物の檜板かじいたを使い、厳めしい装飾を施した金具を大胆に嵌め込んである。古めかしく重厚な扉だった。

ライジヤが軽い困惑を感じながら呼び鈴よりんを押すと、ぶつきらぼうな男の声が話しかけてきた。

「どちらさんだね？」

「ライジヤ・ストーク・サリザンと申す。こちらで待つていと友人に言われて参った」

ややあつて鍵の解除される音がした。

しかし、この扉は自動ではないようで開かない。

ライジヤの信条として、無断で他家の扉を開けて中に入るといふ行為はありえないものだ。

必然的に、通りに立ったまま動かなかつた。

先程の音がちよつと苦笑して再び言ってくる。

「開けたよ。どうぞ、お入んなさい」

「失礼する」

律儀りちぎに言つて、ライジヤは扉を押し開けた。

扉の向こうは建物を貫く狭い通路になつていた。

通路は真つ暗だが、対照的に前方は明るい。

自然の光が燦々さんさんと差し込んでおり、通路の先には

驚くほど豊かな緑が広がつていた。

建物の中のはずなのに見上げるような高木が梢こずえをゆらしている。様々な雑木が空中に枝を伸ばして、

頭上には青い空が広がり、太陽が輝いている。

中庭にしてはかなりの規模だ。

足下の茂みを縫うように小径こみちが設けられていて、色とりどりの花が咲き乱れている。

ライジヤは軽い驚きを感じて景色を眺めた。

木も草花も自然に生えたもののように見えるが、明らかに人の手が入っている。

ライジャの眼には新鮮な光景だった。

中央で眼にする庭園はきちんと整備されたものがほとんどだったからだ。こんな庭もつくれるのかと感心した。

木立の奥から五十年配のがつしりした体軀たいくの男が現れた。丸い頭に額ひたいは広く、眼光は鋭い。なかなかの強面こゝろもてだ。

そのせいかライジャの姿を見ても顔色も変えず、仕草だけでついてくるようにと示した。

ライジャは素直に歩き出した。

曲がりくねった小径は幾重にも枝分かれしており、まるで迷路のようである。

途中で何度か人の姿を見かけた。

木立の陰になつてはつきりとは見えなかつたが、一人で本を読む学生らしい若者もいれば、和なごやかに談笑する老夫婦もいる。

姿は見えても、正面から視線が合うことはない。

そういうふうふうに小径と木立と座席とが絶妙に配置されているのだろう。その人たちからもライジャの姿は見えてはるはずだが、誰も驚いた顔をしない。

ちらつとこちらを見て終わりである。

これはかなり新鮮なことだった。

浅黒い肌、腰まで伸ばした真つ白な長髪、原色の布を身体に巻き付け、顔には独特の刺青しせいが刻まれたライジャの姿は彼の母国トウルクでは当たり前の高僧の身なりだが、中央では誰もがぎよつとなつて眼を見張るのが普通だったからだ。

ライジャを先導する男は小径を右に左に曲がつて、唐突とうとつに足を止めた。

「あ、いらつしゃい」

ルウが笑顔で話しかけてきた。

そこは木立に囲まれた、ちやうど隠れ家のような空間になつていた。

丸い机が置かれ、四つの椅子が机を囲んでいる。

他の二つの椅子にはリイとシエラが座っていて、やはりライジャを見て笑いかけてきた。

「やあ」

「すぐわかりましたか？」

ライジャは自分をここまで案内してきた男を見て問いかけた。

「わたしのことをこの人たちから聞かれたのか？」

「いいや」

「では、この人たちが友人だとなぜおわかりに？」

「何となく、そうじゃないかと思ったのさ。友達は雰囲気が似るからな」

ライジャは戸惑い顔になった。

「……この人たちと、わたしが似ていると？」

男はおもしろそうに喉のどの奥で笑った。

「大雑把おおざっぱにくくればの話だ。——ご注文は？」

「ここは飲食店なのか？」

「一応は」

それにしては献立表メニューも何もない。

ライジャは少し考えて、「ではお茶を」と頼み、便乗してルウが「カフェオレを追加で」と注文した。ライジャは一つだけ空いていた椅子に腰を下ろし、珍しそうに辺りあたりに眼をやった。

木漏れ日がちらちらと光り、木の幹の隙間からも奥行きのある庭の景色が見える。

ルウが言った。

「いいところでしょう、ここ。ほくもエディに教えてもらったんだけど、すっかり気に入っちゃった」

「確かに……しかし、飲食店にしては、あの入口は少々入りにくいのでは？」

「誰でも入れるわけではないんですよ」

シエラが説明した。

「わたしもこの人の紹介で入ったんですが、先程のご主人がお客を選別しているそうで、気に入らない人が来た場合は、いくら呼び鈴を鳴らしても決して扉を開けないとかで……」

リイが笑って言った。

「ライジャなら入れると思つたんだ」

そのライジャは銀色の眼を瞬またたかせた。

ずいぶん変わった営業方針だと思つたのだ。

「失礼だが、それで商売になるのだろうか？」

「利益は最初から度外視しているようです」

「さっきのご主人——ジェイソンって言うんだけど、

大通りのサマーズ通りに貸店舗をいくつも持つてる

大家さんでね。お金には困つてないんだよ。ここは

道楽でやってるんだって」

ライジャはますます感心したように眼を見張つた。

「中央には変わった大家がいるのだな……」

ルウが笑つて言う。

「ご主人が変わつてるせいとか、お客さんもちよつと

変わった人が多いみたいだよね」

自分はその中に入つていないとでも言いたさうな

口ぶりだが、ライジャは真顔で頷うなずいた。

「それはわたしも感じた。他のお客の方がわたしを

見ても平然としているのだ」

中央では珍しいという意見にリイが頷く。

「おれたちもここにいる間はあんまり注目されない。

——ジェイソンの人を見る眼は確かつてことだよ」

ルウも嬉うれしそうに同意する。

「ほんと、いい隠れ家だよねえ、静かで落ち着くし、

人に聞かれたくない話をするのにもつてこいだ」

「何か内密のお話があつたのか？」

リイが笑つて首を振つた。

「そんなに深刻な話じゃないよ。ライジャにここを

教えておきたかつたつていうのが一つ。そうすれば

ジェイソンの店つて言えば通じるから。もう一つは

もうじき社会体験学習なんだけど、何にしようかと

思つてさ、ちよつと悩んでるんだ」

耳慣れない言葉だ。ライジャは表情だけで説明を

求め、ルウが代表して話し始めた。

「連邦大学惑星の中学生と高校生に義務づけられた

授業の一環でね。名前の通り、実際の職場に働きに

行つて経済活動を勉強するつていうものらしい」

らしいというのは、大学からこの惑星に入学したルウはその学習を経験していないからだ。

連邦大学惑星は、社会で立派に活躍できる優秀な人材を育成することを最終的な目標としている。

そのためには成績が良くして運動ができるだけでは不十分だというのが大学側の考えだった。

中学二年生——十四歳ともなれば身体は一人前に近づいてくる。大人顔負けの頭脳を誇るものもいる。

ただし、その肉体と頭脳を支える精神年齢が幼いままでは困る。凶体（ずうたい）の大きい頭でっかちでは意味がないのだ。

そこで生徒に社会人として基本的な資質があるかどうかを見極め、さらには社会の一員である自覚を持たせるため、この社会体験学習が行われている。

そう説明を受けてライジヤはなるほどと頷いたが、同時に疑問にも思ったようだ。

「働きに行くと言っても、中学生の子どもを進んで雇う職場はないのでは？」

「あくまで教育が目的ですることだから、たいした戦力にならないのは百も承知で生徒を受け入れてみたいだよ。ただ、職場にとっても損なことばかりじゃないらしい」

ルウの意見は自分の同級生から得た知識のようで、伝聞の形で話している。

「生徒と地域との交流を深める意味があるし、この体験学習がきっかけで卒業後その仕事に就く生徒も結構いるそうだから」

「ずいぶんと尺度（スケール）の長い青田買いですね」
シエラが感心したが、リイが言った。

「逆に働く例もあるみたいだぞ。この仕事に憧（あこが）れていたけど、体験学習で現実を見て、自分には向いていないと悟ったとか何とか……」

「それはそれで結構なことなんじゃない？ 自分の不適性にいち早く気づいたってことだから」

ライジヤが疑問を述べた。
「学習のためにすることなら、大学生にはなぜその

「講義がないのだろうか？」

「そりゃあ大学生になればちゃんとお金をもらってアルバイトをするからだよ」

もつともない分だが、ここでライジャには別の疑問が生じたらしい。

「大学生になってから働き始めたのでは遅いということだろうか？」

「ある意味、そういうことらしいんです」

シエラが複雑な顔で言った。

「わたしもこの人も、当初はこの体験学習にあまり意義を見いだせなかったんですが……」

リイも頷いた。

「全校生徒に参加の義務があるから避けられないし、単位も掛かってるわけだけど、右も左もわからない子どもに押しかけられても現場の人には迷惑になるだけだろう？ はつきり言って営業妨害だ。それが何で授業扱いになるのか、本気で不思議だったよ」

そもそも学校側から、社会体験学習を行う目的の

一つとして、生徒のコミュニケーション能力や社会的技能スキルを養う意味があるのだと説明されて、二人は首を捻ひねってしまったのだ。

なぜなら、自分たちは実際に社会の中にいるのに、その社会的技能が欠けているという状態が二人には理解できなかったのである。

その疑問に答えてくれたのは寮の上級生だった。

「営業妨害は言いすぎだろう。受け入れ先の職場に取っても、生徒を教育するという意味で意義のある行事なんだぞ」

二人はきょとんと上級生を見返したのである。

「職場が生徒を教育って、どういう意味？」

「たとえば、お金の価値を教えるとかだよ」

「ですけど、中学二年生にもなって、お金の価値がわからない子なんていますか？」

「それがいるんだ。困ったことに」

その上級生は大真面目だった。

「ずいぶん前の話だが、有名な例があつてね。ある

中学生が文具店に買い物に来た。それはいいんだが——うまく買うことができなかった」

「は？」

「その店は客が品物を自由に選び取って会計所まで持っていく方式だった。ところが、その生徒は店の人間を呼びつけて、品物を指さして『これ』としか言わない。店員も面食らったらしいよ。この商品がどうかしたのかと尋ねても、その生徒は『だから、これだってば』と繰り返すだけだったというんだ」

リイは盛大に嘆息し、シエラは額を押さえた。

「まさかとは思いますが……『これをください』と言っているつもりだったんですか？」

「その通りだ。この時は店側が心配して、学校側に『お宅の生徒でちよつと変な子がいる。あの生徒は大丈夫か。ちゃんと授業についていけるのか？』と連絡してくれたらしい。話を聞いて仰天したのが生徒の保護者だ。うちの子に問題なんかあるはずがないと声高に主張した。そこで学校側が生徒に話を

聞いてみると、その生徒は十四歳になるまで一度も自分一人で買い物をした経験がないことがわかった。何か買う時は常に親と一緒に、親が会計をすませていたそうだ」

二人は思いきり疑わしげな顔だった。

「……それで済む問題か？」

「そうですね。親と買い物をする機会があったなら、親のすることを見ているはずでしょうに」

「そう、そこが社会的技能の欠如なんだよ。同時に、子どもを信用しすぎる親の悲劇でもある。そういう親は何もしなくても何も教えなくても、成長すれば子どもはみんな親と同じことが自然にできるようになるはずだと無条件に信じている。親のやることをすぐ近くで見えて育てているのだからできて当然だと。ところが、子どもにしてみれば……」

「親のすることなど見ていないわけですね？」

「それもあるが、本人が学ぼうとしなければ、ただ見ているだけでは何も身につかないよ。その生徒に

してみれば『店に行く、イコール欲しいものが手に入る』程度の認識しかなかったんだから。手に入る手段には興味がなかったんだろう」

「それで十四歳？ 四歳の間違いじゃなくて？」

「……怖い話ですねぇ」

二人は冗談抜きに身震いした。

「もちろん、これは極端な例だが、社会体験学習に行ってみて初めて——今の自分がどんな状態なのか、気づく生徒も多いんだ。たとえば、『事務所の通信端末がずっと鳴っていて、出なかつたら叱られたが、自分の端末じゃないのに勝手に出ていいのか』とか、『何も指示がなかったから何もしないで立っていた。そうしたら仕事をさぼるなど叱られた。理不尽だ、納得できない』とか……」

二人はますます仰天して眼を剝いたのである。

「そこからかよ？」

「失礼ですが、少し大げさに話していませんか？」

疑わしげな視線を向けられた上級生は『規格外の

くせに自分たちは普通だ」とことん言い張る』後輩たちに失笑した。

「ぼくとしては、きみたちにはぜひ他の生徒も大勢いる職場に行ってもらいたい。そうすればわかると思うよ。きみたちがどれだけ中学生離れているか、いやでも実感できるはずだ」

最後の言葉は少々、恨み節うらみぶしが入っている。

ルウは感心しながら頷いた。

「確かに、たとえばがちょっと極端だけど、そういう子がいるだろうなつてことはよくわかるよ」

「わかるのか？」

「わかるんですか？」

「十四歳でしょ？ 大人でもないし子どもでもない。成長度合いにはらつきがあるんだよ。しっかりした子は本当にしっかりしてるんだけど、全体的に経験不足なのは確かだから。中にはまだ幼いつて言うか、程度の低い子もいるつてことだね」

リイはちよつと声を低めて言った。

「それなら、おれたちは本当は二十歳なわけだから、今の同級生と一緒にできないのは当然だろう」

「あのねえ、言わせてもらいますけど、十四歳でも二十歳でもたいして違わないんだよ」

「えっ!？」

「まさか。そこは違わなければまずいでしよう？」

血相を変える金銀天使にライジャが言った。

「いや、この人の言うことは正しいと思う。学生の中にも、知能は高いのに精神年齢は中学生から成長していないような人物が時々見受けられる」

「そういう人ほど少しは社会に出てみたほうがいいんだけどね」

ルウが言い、おもしろそうにライジャに尋ねた。

「アルバイトはしないの？」

「それはわたしも精神年齢が低いということか？」

「冗談でしょ？ 高すぎるくらいだよ。心配なのは社会一般常識のほう」

「それを言われると少々自信がないのも確かだが、

あなたはバイトをしたことはおありか？」

「ないなあ」

「それでは説得力に欠ける」

「で、おれたちの市がちょうどその時期なんだよ」

リイが笑いを噛み殺しながら学校側から渡された説明書を広げて見せた。

この社会体験学習はペーターゼン市の全中学校で実施され、来月の一日から五日間、生徒は何らかの社会体験学習に出なければならぬとある。

その五日間、普通の授業は行われない。

生徒は職場に出勤し、夕方には帰宅して、今日は職場で何を学んだか、どんな発見があったかなどを一日ごとに提出し、最終的に小論文にまとめるのだ。「これで落第もらうと単位がかなり危なくなるから、業種は真剣に選ばないと……」

説明書には受け入れ先の一覧表がついていた。

接客・サービス業として紹介されているのが飲食店、薬局、書店、スーパーマーケット、ホテル業務。

技能業務として美容院、理髪店、皮革金属工房。

福祉関係として保育園、幼稚園、老人ホーム。

もちろん一般的な事務業務オフィスもある。

中には本当にこの仕事を中学生にやらせるのかと首を捻るようなものもある。

「建設・工務店？ 素人しょうとを雇う余地があるのか？」

「誰でも最初は素人ですよ。——とは言え、通信・放送業務——ちよつと仕事内容が知りたいですね」

「警察署に消防署、市役所？ 何をするんだ？」

ライジャが尋ねた。

「生徒はどの業種を選んでもよいのか？」

「基本的にはそうだけど、人気のある仕事は早めに募集がいっぱいになるんだって」

「どういったものが人気なのだろうか？」

シエラが控えめに口を開く。

「女生徒はやはり、おしゃれな店がいいようですよ。制服の可愛い喫茶店とか、美容院とか」

ルウが言った。

「男の子ならやっぱり製造業がいいんじゃない？」

自動車整備工場、宇宙港、これなんか機械工学科や操縦課程の生徒が喜びそうだね。警察署や消防署も

人気なんじゃないかな」

「逆にどういものが人気がないのだろうか？」

「接客業でも業種によっては敬遠されるようですが、事務方や裏側の作業はいつも余るようです」

「好都合だ」

リイが断言した。

「おれたちは人前に入る仕事は避けたほうがいい」

シエラもまったく同感だった。

「なるべく地味なものがいいでしょうね」

「問題は、おれに事務仕事ができるかだよな」

「それを試す意味でも興味深い授業です」

そんな話をしていると、注文の品が運ばれてきた。

いつもなら自動機械が運んでくるのだが、今日は主人のジェイソンが自ら持ってきた。

その際、机の上に広げられた社会体験学習要項の

書類が自然と眼に入ったのか、ジェイソンは珍しく話しかけてきた。

「そっちの二人は、今度、これに行くのか？」

「そうだよ。——ここは受け入れ先には立候補してないの？」

尋ねたのは、受け入れ先の具体的な企業名はまだ発表されていないからだ。

「手伝ってもらうようなことは特にないからな」

ライジャの前には大きなポットと茶碗ちやわんを、ルウの前には両手で包むようなカフェオレポウルを置いて、普通ならそのまま引き上げるはずが、ジェイソンはまた話しかけてきた。

「——行き先は決めたのか？」

「まだだよ。どこがいいか相談してるところ」

「ものは相談なんだが、あんたたちさえよかったら、俺の知り合いの店に行ってくれないか？」

リイもシエラも驚いた。ここへ通うようになって一年になるが、ジェイソンがこんな個人的な用件を

持ちかけてきたのは初めてだからだ。

そもそも、彼は客と必要以上の話をしない人だと思っていたから、なおさら意外だった。

ルウがいち早く察して尋ねる。

「何か事情でも？」

「まあな。——ちよつと邪魔していいか？」

飲食店の主人が客と同じ机につこうという。

型破りだが、この状況ではそれも『あり』だろう。

四人は快諾かいだくし、ジェイソンのために場所を空けた。

椅子が足らなかつたが、ジェイソンは自動機械に

追加の椅子を運ばせて、四人と一緒に机を囲んだ。

「俺の知り合いにテオドルって奴がいてな。この近くに店を構えてる」

「何のお店？」

「飯屋めじや」

シエラが心配そうな顔になった。

「……というと、仕事は接客業ですか？」

リイも気の進まない様子で言う。

「なるべく目立ちたくないんだけどな」

ジェイソンは呆れたように笑ったものだ。

「その外見で目立たないってのは無理があるだろう。あんたたちにあいつの店に行ってもらって、派手に目立ってもらえば、いい宣伝になると思うのさ」

恐ろしいことをさらりと言う人である。

しかし、目立つから宣伝に使うという割り切った考え方は至極もつともだし、的を射ている。

ルウはジェイソンの言い分に興味を持ったようで、突っ込んだ質問をした。

「何か急にテオドールさんのお店を宣伝する必要があるんですか？」

「その通りだ」

ジェイソンはちよつと笑った。

話が早くて助かると思ったのだろう。

「——二年前、奴のかみさんが病気で亡くなつてな。以来、奴はすっかりおかしくなつちまつた」

「奥さまはおいくつだったんです？」

「五十にもなつてなかつたよ」

「それは……お気の毒です」

「まつたくな。何だつてあの若さで……かみさんも無念だつたらうが、テオドールの奴は顔は悪いが、かみさんにぞつこんでな。自分より先にかみさんが逝つたことがどうしても認められなかつたんだらう。それからずつと酒浸りだつた」

「お店をほつたらかして？」

「ああ。店は奴の息子のヨハンが切り盛りしてた。ただなあ、まずいことにテオドールの奴は腕だけは確かだつたんだ。ヨハンがいくら頑張つたところで親父の味と違つてんで客が一気に離れちまつてな。一年半前、ヨハンはどうとう家を飛び出しちまつた。それでも奴は変わらなかつた」

リイとシエラが驚いて指摘した。

「丸二年も呑んだくれてたのか？」

「よく続きましたね」

シエラの言葉は『そんな自堕落で怠惰な生活が』

という意味だったが、ジェイソンは『呑む資金が』と受け取つたらしい。忌々し^{いまいま}そうに言つたものだ。
 「ああ。蓄え^{たくわ}を呑み^く尽くして、店も抵当に入れて、借金までしやがつて……」

金銀黒天使とライジャは互いの顔を見合わせた。

ルウが代表してはつきり宣言する。

「そういうろくでなしに手を貸すのは、穴の空いたバケツで水を汲^くもうとするようなものだと思います。端的に言えば時間の無駄です」

ジェイソンは大きな肩をすくめた。

「俺もそう思つたさ。本人が好きでやつてることだ。奴が死のうが生きようが知つたこつちやねえつてな。」

「——ところが、ここへ来て事情が変わつたんだよ」

「さしずめ、家出した息子さんですか？」

「ご名答。ヨハンから一年半ぶりに連絡があつてな。いつの間にか嫁さんもらつて——ついでに子どももできたんだとよ」

ライジャが真顔で言つた。

「たいへん失礼だが、子どもというものはついでにできるようなものではないと思うが……」

「そいつは違うぜ、お坊さん。結構ついでだったり、ものの弾み^{はず}だったり、ひよんなことでできたりするものなんだよ。赤ん坊つてやつは」

リイが真顔で言つた。

「ある意味、真理だ」

ルウが尋ねる。

「その赤ちゃんはまだ女の人のお腹の中ですか？ それとももう生まれてるんですか？」

「生まれたんだが、まだ保育器の中なんだと。いつ出られるかもわからんらしい」

「息子さんがいるのはこの星ですか？」

「ああ。といつてもヨハンは自分の居場所を親父に教えてないが、国内にいるのは間違いない」

連邦大学惑星では妊娠・出産に費用はかからない。しかし、長期の治療を要するとなれば無料では

いかならないはずだ。

ヨハンは、少しいいから援助してくれないかと、父親に泣きついてきたのである。

「会ったこともないとは言え、孫の命が懸かっている。さすがにいつまでも飲んだくれてる場合じゃねえと、野郎もようやく眼が覚めたんだな」

「遅すぎるけど……寝っぱなしよりはましかな」

リーの感想に、ジェイソンはじんわりと笑った。彼の顔には味わいのある深い皺しわが刻まれている。

親子ほども年の離れた少年たちを見つめる視線は暖かいが、優しいばかりの眼ではない。

底知れない深さを感じさせる眼差しだった。

恐らくこの人は若い頃はもつと殺伐としており、何度も修羅場しゆらばをくぐってきたに違いない。

「そうさな、寝っぱなしよりはましだ。奴はやつと酒を断つて、二年ぶりに店を開けたんだが、何しろ、今までの行状が行状だけに客が戻ってこないのさ」

「それは当然でしょう」

ルウが断言した。リーもシエラもライジャでさえ

この意見に頷いた。

「治療費を得るために店を開ける。理屈はわかるが、そのためには店が繁盛しなくてはならない道理だ。

経済は不案内だが、客商売なら風評は無視できない。二年の間に店主の悪い評判が広まっているとしたら、すぐに評判が回復するとは思えない」

「同感。第一、お店は抵当に入ってるんでしょ。よく営業を再開できましたね」

その資金はどこから出たのかというルウの問いに、ジェイソンは曖昧あいまいな笑顔で応えた。

ルウはちよつと驚いて指摘した。

「あなたがお金を出したんですか？」

「——断つておくが、情にほだされたわけじゃない。回収の見込みは充分あると思ったからな」

テオドールは突然ジェイソンを訪ねてきて、
「店を開けるから金を出せ」

と言つたらしい。

一つ間違えば立派な恐喝だ。

「——で、出したんですか？」

「ああ」

「お店はもう抵当に入ってるの？」

知人がやつと立ち直ったと思いたいのはわかるが、二年も呑んだくれていた人だ。

そこまで信用しても大丈夫なのかと全員が思う中、ジェイソンは自信たっぷりに言った。

「奴の料理は本物さ。——あれが食えなくなつて、どれだけ地団駄踏んだことか……」

「二年前はでしょう？ 今はどうなんですか」

「——残念ながら、と言うべきか、料理の神さまは今も奴に味方してるよ。いっそ酒の飲みすぎで舌をやられたとか、腕もがた落ちとかになつてりゃあ、心おきなく見捨ててやれたんだが……」

本当に悔しそうに言ったジェイソンだった。

「理由はどうあれ、奴がやつとやる気を出したんだ。——本人に働く意志はある。稼げるのもわかつてる。問題は、二年の間にこびりついた悪評をどうやって

とつばらうかだ。野郎、営業や宣伝はさっぱりでな。自慢じゃねえが、この俺もだ。苦肉の策として社会体験学習に協力するように言ってみただよ」

眼の付けどころとしては悪くない。

ともかくにも店が営業再開していることを人に知つてもらわなくては話にならないからである。

「体験学習の受け入れ先として認められたからにはテオドルさんの店は学校の審査に通つただね」
妖しげな店ではないと証明されたことになる。

経営状態の悪い店、風紀の悪い店などに学校側が大事な生徒を預けるはずがない。

しかし、自分で勧めておきながら、ジェイソンは何やら複雑な顔だった。

「ただなあ、考えてみれば、奴のところは中学校の子どもを送り込んで……意味がないって言うか、生徒がかわいそうって言うか……」

「つまりテオドルさんは普通の中学生に好印象を持たれる人じゃないわけですね？」

「一つ訂正すると『普通の中学生に』じゃあないな。『たいていの人間に』だ」

「なかなかハードル高いですねえ……」

「ああ、困ったもんさ。腕だけはいいんだが……」

ジェイソンは自分を見つめているリイとシエラを逆に見つめ返して、苦笑しながら正直に言った。

「その点、あんたたちなら何が出てきてもびくともしないだろう。引き受けてくれたら、あんたたちが卒業するまで俺の店での飲み食いは無料^{ただ}でいいよ」
 妙なところで妙な具合に買われたものである。

ルウは相方の金の天使に問いかけた。

「どうする？」

「正直、目立つのは遠慮したいところだけど……」

そう前置きした上で、リイは言った。

「ちよっとおもしろそうだとは思う」

「わたしもです。立派な人助けにもなりますから。

ただ、問題は……」

シエラが言いかけた言葉をルウが続けた。

「だね。テオドルさんのお料理は本当にそんなに美味しいのか、そこを確認しないと始まらない」

なかなか厳しい天使たちである。

ジェイソンもそれはわかっていたようで、リイとシエラに尋ねてきた。

「晩飯を食わずに、その時間に外出できるか？」

「事前に申請すれば大丈夫」

「それじゃあ、明日の夜ここへ来てくれ。奴の店へ案内する」

テオドルの店はアレクサ通りから北に向かって二本先のコーナー通りにあつた。

幹線道路のサマーズ通りから入る細い道である。

通りに並んでいるのはほとんどが雑居ビルなので、飲食店があることに気づかない人もいるはずだ。

夕方、ほとんどの飲食店が夜の営業を始める頃、

リイとシエラはジェイソンの案内で、テオドルの店を訪れた。

成り行き上、ルウとライジャも一緒だった。

一階の店舗の外にはなかなか広いスペースがあり、机と椅子が並べられるようになっていた。

しかし、今は机は隅に追いやられ、椅子も重ねて積み上げられている。出番がないということだ。

外観をざっと眺めて、ルウが訊いた。

「こういうお店って、ランチタイムの後は夕方まで閉まっているものなんじゃないんですか？」

「普通はな」

とジェイソンは言った。

「ただし、体験学習の間は午後もずっと営業する。

その代わり、夜はちよいと早めに閉める。でないと生徒の仕事が裏方ばかりになるからな」

「そういうものなんですか？」

「ああ、飲食店ではよくある例だ。生徒を帰した後、夜の営業に切り替えて酒も出すんだよ」

「詳しいですね？」

「そりゃそうさ。俺はこの街生まれのこの街育ちだ。

「中学校の時は体験学習にも行った口さ」

言いながらジェイソンは店の扉を開けた。

「テオ、いるか」

続いて店内に入り、シエラが眉を顰めた。

ルウもすぐに同じものに気づいたが、この店内は快適とは言いがたかった。

机や椅子、内装がかなり古びているのはご愛敬としても、それらがずいぶん薄汚れているのである。

清掃が行き届いていないのが一目でわかる。

極端な話、机の上を指でなぞったらその指に埃がつきそうな、飲食店としてあるまじき状態である。

奥から、のっそりと人が現れた。

五十年配の男だった。

これがテオドルだろうが『酒を断って真つ当になった』というジェイソンの言葉に特大の疑問符をつけたくなる容貌だった。

褐色の顔に深い皺が刻まれている。額は頭頂部近くまで禿げ上がって、櫛を入れない頭髮はもじゃ

もじゃで、顔の下半分も乱れた鬚ひげに覆おおわれている。

眉まゆがぐつと前に張り出し、その奥の眼は妙に鋭く、唇くちびるは口を利くのは嫌とばかりにきつく引き結ばれ、身体つきはがっちりとしたまじい。

悪人面とまで言ったら言いすぎになるが、

「気むずかしそう」

「恐そう」

「目つきが悪い」

「愛想がない」

「いつも怒っているみたい」

これらの集大成のような顔をした人物だったので、リイがずばりと評価を下した。

「……徹底的に接客業には不向きなタイプだな」

一方、シエラはますます眉を擡ためた。

料理は顔でするものではないから、テオドールの容貌が気に入らなかつたのではない。

不快だったのは彼の服装だ。

元は白かつたと思われるシャツはすっかり灰色で

しわくちゃ、ズボンもどろどろである。

店が不衛生な上、本人も衛生管理ができていない。こんな汚い場所で、こんな不潔な人間のつくつた料理など進んで食べる気にもなれない。これはもう味を見る必要もないと思つて眉を擡ためたのだ。

その懸念けんねんをはつきり口にしたのはルウだった。

「ずいぶん汚いですねえ。この店も、ご主人も」

無愛想なテオドールの額に青筋が浮かぶ。

彼が何か言う前にジェイソンが笑つて弁解した。

「そう馬鹿にしたもんでもないんだぜ。おう、テオ。厨房ちゅうぼうをちょっと覗のぞかせてもらおうわ」

テオドールが初めて口を開いた。

「勝手な真似をするな」

「そういう台詞せりふは借金を返してから言うんだな」

ジェイソンは意に介せさず、四人を厨房に案内した。店はカウンターを含めて二十五席ほどの狭さだが、奥の厨房はかなり広かつた。

その広い厨房の隅々まで清掃が行き届いている。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。